

003

編集長独白

015

表紙の時計／ジャガー・ルクルト デュオメトル・ユニーク・トラベルタイム

013

Editor's Choice!

オーデマピゲ ヨイヤルオーク コンセプト GMT トゥールビヨン／ベル&ロス ヴィンテージ WW2 ミリタリー  
トゥールビヨン／ジャケ・ドロー パーペチュアルカレンダー エクリプス／カルティエ カリブルドウ カルティエ  
ダイバーウォッチ／ユリス・ナルダン デュアルタイム マニファクチュール／シャネル J12 1365  
ブルガリ ブルガリオクトヴェロッシモ／カルティエ パロンブランドウ カルティエウォッチ  
IWC アクアタイマー クロノグラフ 50イヤーズ・サイエンス・フォー・ガラパゴス

026

世界は時計で回っている。

028

日本初上陸——レヴェレーション R03 レジエンド フライバック

## 変貌の妙を楽しむマジカルウォッチダイアル

030

日本初上陸——アントワヌ・マーティン

## 大型バランスホイールに込められた時計哲学

032

シヨパール共同社長 カールフレドリッヒ・シヨイフレさんに訊く

## 日本市場での正しい理解に向けた第一歩

ファミリー・ビジネスを維持し、スイス・フルリエに構えるふたつの工房で自社開発・製造ムーブメントを強化し、  
また今春にはパリのホテルを買収するなど、幅広く発展するシヨパール。  
時計の開発を率いるカールフレドリッヒ・シヨイフレさんに現在の状況を伺った。

037

2014 新作情報 (バーゼル編)

## 新奇さより品質。安定成長の持続を目指して

3月27日から4月3日にかけて開催されたバーゼルワールド。昨年、全面的な改装を経て、モダンで明るい会場となったが、  
今年はブランドのブースの配置にもわずかな変更が加わり、時計業界の新たな側面が見え隠れした。  
変わらず好調なスイス勢をはじめ、先端技術を競う日本メーカーなど、各社の新作をみていきたい。

094	ラドー◇ダイヤマスターコレクション◇
	<b>進化を遂げるセラミックス技術</b>
096	時計ジャーナリスト 瀧澤 広の◇マイ・チョイス◇ 第14回 シンプル・アフォーム・ウオッチ
101	ヴァルカン◇50s プレジデント◇ウオッチ◇&◇アヴィエーターGMT◇ 『パテックフィリップ展◇歴史の中のタイムピース』より
	<b>継承されるパテックフィリップの時計デザイン</b>
	パテックフィリップの代表的な腕時計10点の新旧を比べ、時の流れを超えて受け継がれているデザインをみる
104	腕時計新着情報
111	ピアジェ エローズパッション
112	IWC ブティック オープン
113	オーデマピゲ 新ブティック オープン
114	全面リニューアルした ◇ブライトリング◇ブティック東京◇
113	◇スピリット・オブ・ブライトリング京都 by OOMIYA◇オープン
116	日本に上陸するルディ・シルヴァ
117	クロノメトリック+ オブザヴァトリ
118	ウブロ◇2014 FIFAWORLDカップ™ ブラジル記念モデル◇
120	マニファクチュール ジャン・ルソーCEO ジャック・ボルディエさんに訊く
122	インフォメーション
124	メーカー&ショップリスト
128	次号予告

# 変貌の妙を楽しむマジカル・ウォッチ・ダイアル

新進高級時計メーカー、レヴェレーションが、変貌する時計とともに日本市場にお目見えした。スイス・ヌシャテルに本部を置く電子技術とマイクロテクノロジー開発研究機関 CSEM の協力を得て開発されたユニークな文字盤はまさに先端技術の賜物だ。

スイス時計産業界が絶頂にあった2008年の夏までは、数多くの新規ブランドが次々にわが国に上陸したものであった。当時は、ユニークな機構や斬新なスタイルをもったモデルなど、見ているだけでも楽しくさせられるリストウォッチに混じって、痺れるほど高価なモデルも競うように輸入されたが、こうした動きはその直後に起ったリーマン・ショックの影響をもろに受け、残念ながら急激な勢いで萎んでしまうのはよく知られるとおりである。しかし、あれから5年あまり。当時とは較べるべくもないが、新しい時計ブランドの上陸が少しばかり増えつつある今日の状況は、時計好きにとってみればまさに嬉しい変化と言えるだろう。もちろん、今回新たに輸入が開始されたユニーク・ウォッチ、レヴェレーションもその中のひとつに数えることができる。

2007年、スイスのレマン湖を見下ろすリュー・シユル・モルジュ村で創業を開始したレヴェレーションは、アヌ

ーク・ダンテとオリビエ・リユーという2人のデザイナーが率いる小さな時計メーカーである。かつてデザイン学校で出会ったという彼らは、それぞれ1990年代後半から2000年はじめにかけて、オーデマ・ピゲ（ロイヤルオーク・コンセプト）やオメガ（デビル・コーアクシヤル）、またTAGホイヤーやモンブランと言った大手時計メーカーで腕を振るいつぼうで、カルティエやエルメス、ピアジェといった有名メゾン&宝飾系ブランドでも確実な実績を残している。

この不思議なダイアルはオーナーの好みによって、ムーブメントの見えるシルバー・ダイアルとしても、あるいは精神なブラック・ダイアルとしても使い分けが出来る。

その独自の構造は、カメラで使用する偏光フィルターを思い浮かべて貰えると分かり易いかも知れない。つまり、カメラ用の偏光フィルターとほぼ同様に、文字盤は光を制御する特殊なスリットを刻んだ2枚のクォーツ製ディスクで構成されており、そのうちの1枚のディスクを回転させることで通過光をコントロールしているのである。具体的には、ベゼルとリンクさせたウォーム・ギアを下側のディスクに取り付け、これを自由に回転できるようにしているのだが、効果のほどは抜群だ。驚くことなかれ、ナノテクノロジーを駆使し、精巧なスリットを刻んだ2枚のディスクによって、それまで透明だった文字盤は完璧なブラック・ダイアルへと変貌を遂げるのである。

さて、最後になってしまったが、このマジカル・ダイアルを装備した魅力的なモデルを紹介しよう。それは、リーディング・フライバック機構を搭載した2プッシュ/3カウンター式のクロノグラフ、R03レジェンド・フライバックである。3気圧防水機能とシースルー・バックを装備した直径45mm×厚さ14mmのケースに積み込まれるのは、ETA2824をベースとするオートマティック・ムーブメントにデュボア・デプラ製モジュールを組み合わせたCal.FB01で、61石、2万8800振動、パワーリザーブ約42時間のスベックをもつ。ケース素材はチタニウムと18Kピンクゴールドの2種類が用意されており、ブラックのラバー・ストラップがつく。

なお、マジカル・ダイアルを装備したコレクションは、同じく2013年にトゥールビヨンのR04がデビューし、さらに今年のパールワールドでは中3針式オートマティックのR05が発表されている。



マジック・ダイアルを組み込んだR03レジェンド・フライバック。ノッチが刻まれたダイアルを90度回転させることによって、透明のダイアルをブラック・ダイアルに変化させることができる。色が変わるのはフランジよりも内側の“文字盤”部分で、当然ながら上側のディスクに載せられていたパー・インデックスはそのまま残る。その技術の高さもさることながら、秀逸なアイデアには脱帽させられる。価格はチタニウムが226万8000円、18KPGで388万8000円となる。



ケースはシースルー・バック仕様を採用されており、独自の形状をしたオートマティック・ローターの動きを見ることが可能である。もちろん、ラグやミドル・ケースの形状をはじめとして、クラウンやプッシュ・ボタンなどからは、心地よいデザインがなされた“細部”を感じ取ることができる。



「チェリーニ タイム」。チェリーニの新作のなかで最もベーシックなモデル。直径39mmの18Kホワイトゴールド(写真)あるいは18Kエバーローズゴールドのケースにブルーパラクロム・ヘアスプリングを装備する、自社製自動巻き、Cal.3132(31石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約48時間。ブルーパラクロム・ヘアスプリング。COSC認定クロノメーター)を搭載する。文字盤はホワイトあるいはブラックラッカーで、細く長いバーインデックスと12、3、6、9時のローマ数字のインデックスを組み合わせている。5気圧防水。アリゲーター・ストラップ。予価156万6000円。今秋発売予定。

「チェリーニ デイト」。3時位置に小窓ではなく指針式の日付表示を備えることで、文字盤デザインがエレガントな個性を作っている。文字盤全体とゴールドで縁どりされた日付のサブダイヤルにはギョウシェが施されている。ケースは直径39mmの18Kホワイトゴールドあるいはエバーローズゴールドで、自社製自動巻き、Cal.3165(31石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約48時間。ブルーパラクロム・ヘアスプリング。COSC認定クロノメーター)を搭載する。5気圧防水。アリゲーター・ストラップ。予価183万6000円。今秋発売予定。



「チェリーニ デュアルタイム」。6時位置に第2時間帯の時分表示を備えたモデルで、サブダイヤルの9時位置の小窓に太陽あるいは月が現れ、昼夜を表示する。また時針はリュウス操作で1時間単位で調整が可能だ。上のモデルと同様に、サブダイヤルはゴールドで縁どりされ、文字盤全体とサブダイヤルの内側はギョウシェが施されている。直径39mmの18Kホワイトゴールドあるいはエバーローズゴールドのケースに自社製自動巻き、Cal.3180(31石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約48時間。ブルーパラクロム・ヘアスプリング。COSC認定クロノメーター)を搭載する。5気圧防水。アリゲーター・ストラップ。予価199万8000円。今秋発売予定。



# ROLEX ロレックス

©日本ロレックス 03-3216-5671

プロフェッショナル・モデルが話題の主役になることが多いロレックスだが、今年はエレガントな側面も注目された。ルネッサンス期のイタリアの彫金師であり彫刻家、画家でもあったベンベヌト・チェリーニの名を冠した「チェリーニ」コレクションに、古典的な優美さをもつ3つの新作が登場した。一方、オイスターではGMTマスターIIに「青・赤」ベゼルがセラクロムで登場した。赤のセラミックの実現には長年にわたる研究開発を要したという。またロレックスとしては初めてシリシウム製ヘアスプリングがレディースモデルに採用され、多岐にわたる開発を示した。

デザインと細工、素材研究など、幅広い研究成果を示した新作



「オイスター パーベチュアル デイトジャスト パールマスター 34」。ジュエリー・モデルで、直径34mmのケースには18Kイエローゴールド(写真)、ホワイトゴールド、エバーローズゴールドがあり、すべてに455個のダイヤモンドをセットした文字盤を備えている。またベゼルにも貴石をセットし、写真のモデルでは12個のバゲットカットのピンクサファイアと24個のバゲットカットのライトピンクサファイアをセットする。ムーブメントはCOSC認定の自動巻き、Cal.2236(31石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約55時間)を搭載し、ロレックスとしては初めてのシリシウム製「シロキシ・ヘアスプリング」を装備している。予価1195万5600円。今秋発売予定。



「オイスター パーベチュアル GMT マスターII」。1955年に発表された初代GMTマスターのブルーとレッドのベゼルをセラクロムで装備したモデルが誕生した。これは製造が困難と言われる赤のセラミック製造を実現した成果で、まずレッドでセラミックディスクを作り、その半分に化学溶液を浸して焼くことで、レッドからブルーに変化するという。ベゼルに刻まれた24時間目盛りはPVD加工でプラチナの薄い膜をコーティングし、耐久性を高めている。COSC認定クロノメーターの自動巻き、Cal.3186(31石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約48時間。ブルーパラクロム・ヘアスプリング)を直径40mmの18Kホワイトゴールド・ケースに搭載する。10気圧防水。予価388万8000円。今秋発売予定。



「オイスター パーベチュアル シードウエラー 4000」。1220m防水の「シードウエラー」の最新機種。逆回転防止ベゼルには傷がつきにくいブラックのセラクロムが採用され、また長時間発光のクロマライトディスプレイが視認性を高めている。ケースは直径40mmでヘリウムガス排出バルブを備え、ブレスレットはロレックス グライドロック エクステンションシステムによって2mm刻みで最大約20mmまで、またフリップロック エクステンションリンクで約26mmまで延長が可能だ。ムーブメントはCOSC認定クロノメーターの自動巻き、Cal.3135(31石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約48時間。ブルーパラクロム・ヘアスプリング装備)。価格102万6000円。

# 進化を遂げるセラミックス技術

「いつまでも美しいままで使っていたく」を目指して素材を追究したラドローが、セラミックスに着目したのは1980年代のこと。その後、今日まで変わらぬセラミックスの研究開発を続けてきたが、現代の先端技術が可能にしたのは、「普通」に見える時計だった。

「変わらないもの。変わるもの」。この言葉はラドローの名がスイス時計業界に登場してから今日に至るまでの、半世紀以上の時計作りの歩みを語るにふさわしい。1957年、スイス・レンゲンナウのシュラップ社はムーブメント製造から完成品メーカーへと舵を切り、社名をエスペラント語で「車輪」を意味するラドローに改めた。彼らは輸出先として中国や日本、南米に目を向け、他社に先駆けてこれらの地に市場を開いた。また60年代に入るとスクラッチレジスタント<sup>®</sup>を製品開発の要とし、62年にはベゼルにハードメタルを採用したラドローダイアスター<sup>®</sup>を世に送り出している。市場開拓も製品開発も競争に勝つための手段だったと想像できるが、それを推進した進取の気象が今日のラドローを導いてきたといえるだろう。

「傷つきにくく、いつまでも美しさを保つ時計を作る」。このことはラドローにとつて、変わらないもの<sup>®</sup>であり、一方、技術の進化やラドローを取り巻く環境が、変わるもの<sup>®</sup>を生み出している。高い硬度をもち、傷つきにくいセラミックスに着目し、86年にはプレスレットにとり入れ、90年にはフルセラミックス・ウォッチを発表し、第一歩を踏み出した。

当初は酸化ジルコニウムを原料とする一般的なハイテクセラミックスのみだったが、現在ではセラモス<sup>™</sup>、プラズマハイテクセラミックス、シリコンナイトライド、シリコンナイトライドとチタニウムナイトライドの混合素材という4種類のバリエーションも加わっている。特にラドローが特許をもつプラズマハイテクセラミックスは、酸化ジルコニウムで成形したケースやプレスレットのコマをメタングラスが入った摂氏2万度のタンクに入れることで、化学変化が起き、白いセラミックスは金属風のプラチナカラーへと変化。こうして写真にある時計のよう

に、メタルのように見えながらもヴィンテージ硬度1500という傷つきにくい時計が誕生する。

ところで通常、セラミックスの腕時計はケースの中にメタルの枠を入れ、そこにムーブメントを固定するが、ラドローはセラミックスのみのモノブロック構造を開発した。2011年に発表した、厚さ5ミリという「ラドロートゥルーシンライン」はモノブロック構造の賜物でもある。

またプレスレットも横長のコマを繋ぎ合わせた1連に始まり、今日では大中小の3種類のコマを合わせた5連タイプも可能となっている。セラミックスは液状の原材料を射出成型し、約1450度で焼結するが、焼結の際、23%縮小する。それを計算して精密に型を作り、また原料を型に正確に流し込み、均一に焼く技術の進化なしには、モノブロック構造も5連プレスレットも実現しない。

過去にはひと癖あるデザインがラドローの特徴であったことは否めない。しかし技術進化によって、ラドローダイヤモンドのように「普通」に見える時計へと変貌を遂げている。ミニマルでモダンなデザイン、装着感にすぐれたプレスレット、しかも傷つきにくく、肌にやさしい時計は、日常的に腕に着ける時計にふさわしい。こうした普通への変貌は、変わらぬ進取の気象で未来に向けて、車輪を動かすラドローの精神の表れでもある。

しかし技術的にも資金的にもラドローのみでは開発に限界がある。1983年、ラドローはスウォッチグループの一員となったが、ムーブメントも外装もグループ内の専門メーカーの協力を得られることは大きい。今日ではラドローで開発されたセラミックス技術はグループ内の他ブランドへと広がりを見せている。こうして技術開発努力が、変わらないもの<sup>®</sup>を生み出し、次世代を築いている。



「ラドロー ダイヤマスター」。右は自動巻きクロノグラフ、Cal.ETA2894-2 (37石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約42時間)をポリッシュ仕上げのブラックハイテクセラミックスのケースに搭載する。昨年から登場した5連のハイテクセラミックスのプレスレットは装着感に優れるが、パーツ製造には高い精度が要求される。ケース径45mm。10気圧防水。価格45万3600円。左は自動巻き、Cal.ETA2892A2 (21石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約42時間)をプラズマハイテクセラミックスのケースに積んでいる。ストラップはアリゲーターで、セラミックスでありながらも金属の質感をもつケースと調和する。10気圧防水。価格25万9200円。

『パテック・フィリップ展』歴史の中のタイムピース』より

文／瀧澤 広 写真／小野静穂／パテック・フィリップジャパン

パテック・フィリップが1月17日から19日の3日間、明治神宮外苑の聖徳記念絵画館において開催した『パテック・フィリップ展』歴史の中のタイムピース』には、ジュネーヴのパテック・フィリップ・ミュージアムが所蔵する貴重なアンティーク・ピース約100個が遙々海を越えて展示されたのは、すでに前号でリポートしたとおりである。日本とスイス

の国交樹立150周年を記念し、さらにパテック・フィリップ創業175周年の特別企画として開かれたこのエキシビションは、真冬の寒い時期にも係わらず入場者数1万3200人以上という大成功をおさめたが、ここでは10機種のアール・ドリス・トウオッチにスポットをあて、そのデザインを今に伝える現行モデルを併せて紹介しよう。



パテック・フィリップの歴史的なリストウォッチは、絵画館の中央に置かれた展示ケースに並べられた(写真上)。こうしたエキシビションには欠かせない存在のフィリップ・スターン名誉会長。左は初めて来日した奥様のゲイディさん。

#### Ref.96からRef.5196

1930年代は懐中時計と腕時計の生産比率が逆転し、これ以降リストウォッチの時代が到来した時期で、1932年に登場したカラトラバRef.96 (Cal.12"-120マニュアル) は、もっとも有名なラウンド・ケースをもった腕時計のひとつ。様々なバリエーションが存在するが、ドーフィン・ハンドとバー・インデックスの組み合わせで、ひと時代を築き上げた。そのデザインは同じく30mmのRef.3796や33mmのRef.5096を経て、2004年にデビューした現代のRef. 5196へと結びつく。37mmケースに手巻き式の215PSマニュアルを搭載 (18KRG : 240万8400円)。

※写真とタイトルは左が旧モデル、右が新モデル (以下同)

#### Ref.96SCからRef.5296

スモールセコンドのRef.96をセンターセコンド仕様に置き換えたのがRef. 96SC (Cal.12"SCマニュアル) で、その2年後の1934年にデビューした。センターセコンドは当時としてはモダンなデザインだったが、シュマン・ド・フェール型のミニット・トラックも大きな特徴。これを現代に甦らせたのが2005年に生産が開始されたRef. 5296である。38mmに拡大されたケースと3時のデイト窓が現代を象徴するものの、バランスが取られたデザインはアンティーク・ピースにもけって劣ることはない。Cal.324SCオートマチック搭載 (18KRG : 294万8400円)。

